

岩手県埋文センター文化財調査報告書第4集

二戸市 沢内遺跡

(昭和52年度)

(財)岩手県埋蔵文化財センター

沢 内 遺 跡

1. 遺 跡 所 在 地 二戸市米沢字沢内
2. 事 業 主 体 岩手県
3. 調 査 主 体 勸岩手県埋蔵文化財センター
4. 調 査 員 主任専門調査員 上野猛
5. 調 査 期 間 昭和52年6月16日～9月30日
6. 調 査 面 積 3,250㎡
7. 発 掘 面 積 3,250㎡
8. 遺 跡 記 号 SU77
9. 協 力 機 関 二戸市教育委員会、岩手県二戸土木事務所
10. 協 力 員 柳沼賢治（東洋大学学生）

序

岩手県二戸地方は、北上山地と奥羽山脈にはさまれ、馬淵川によって形成された標高 120～140 m の段丘が存在しております。この段丘は、縄文時代より現代まで生活の場として利用され続けて参りました。二戸市堀野遺跡、一戸町蒔前遺跡等全国に周知されている所であります。

本遺跡もそれらの段丘上に立地するものであります。本遺跡調査は、建設省岩手工事々務所によつて建設される二戸バイパスに伴なって、県道田子線の改良工事関係の緊急調査であります。

本工事関係の遺跡は昭和51年調査の荒谷B遺跡、53年調査予定の沢内B遺跡の3遺跡であります。これらは、古くから二戸地方は縄文時代遺跡の豊庫といわれて参りましたが、その例にもれず、いずれも縄文時代遺構を中心としたものであります。

本遺跡は縄文時代後期から晩期にかけての集落址であり、全住居址が切り合い関係を持っているという特異な遺跡でありまして、住居址の変遷、集落の在り方など興味ある問題を提示してくれたものと考えております。

本工事関係遺跡は昭和51年調査の荒谷B遺跡は岩手県教育委員会によって為されましたが、昭和52年4月に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが設立され、沢内遺跡及び沢内B遺跡は埋蔵文化財センターに移管されたものであります。

本調査は、工事計画との兼ね合いから、6月16日より、9月14日まで行いましたが、何分にも限られた調査員数であり、最小限の調査員派遣となり、関係各位に多大なるご苦勞をおかけいたしました。誠に申しあげます。

幸いに、県土木部、二戸土木事務所、二戸市教育委員会等関係各位のご協力、ご援助によって予定期間を延長して調査することができ、全調査を終了することができました事を心からお礼申し上げます。

本報告書を短日時で上梓できましたのは、担当者の努力と共に発掘調査に協力下さった地元協力員の方々、整理作業に従事して下さいました協力員の方々へ負う所大であると考えております。

本報告書が広く学術研究、文化財保護の資料として活用されることを心から願って止みません。

昭和 53 年 3 月

財団法人岩手県埋蔵文化財センター

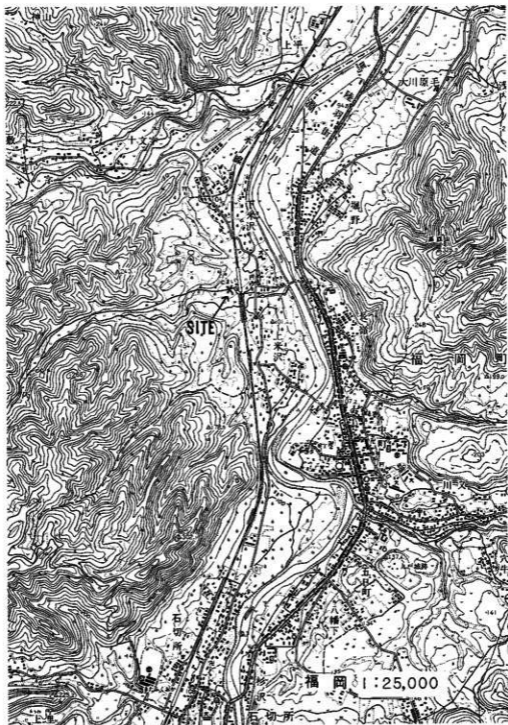
理事長 畑 山 新 信

目次

I. はじめに	2
II. 遺跡の位置と環境	3
III. 調査経過	5
IV. 基本層序	6
V. 遺構	9
(1) 住居跡	9
(2) 土塼	15
(3) 溝状遺構	18
VI. 遺物	19
(1) 土器	19
(2) 土偶および土製品	22
(3) 石器	22
VII. まとめ	27

挿 図 目 次

挿図1 遺跡の位置 $\frac{1}{25,000}$	1
挿図2 遺跡附近の地形.....	4
挿図3-A 基本層序.....	7
挿図3-B 層序模式図.....	17
挿図4-A 遺構配置図-1.....	10
挿図4-B 遺構配置図-2.....	10
挿図5 住居跡-1.....	11
挿図6 住居跡-2.....	2
挿図7 住居跡-3.....	14
挿図8 土 壇.....	16
挿図9 漆状遺構.....	17
挿図10 土 器.....	20
挿図11 土 製 品.....	23
挿図12 石 器.....	23



神岡1 遺跡の位置

I. はじめに

二戸市沢内遺跡に対する緊急発掘調査は昭和52年6月16日より開始され、同年9月30日をもって終了した。本遺跡は岩手県二戸市より青森県田子に至る県道二戸～田子線の改良工事に伴い実施された分布調査により確認された二戸市内の遺跡の一つである。この県道改良工事によって破壊される遺跡は二戸市だけで3ヶ所を数える。そのうち荒谷B遺跡については昭和51年度に調査が行われ、歴史時代および縄文時代の遺構が検出され、すでに調査報告が刊行されている。昭和52年度には本遺跡に対しての調査が行われ、歴史時代の遺構と思われる壕状遺構および縄文時代の遺構、遺物等が多く得られた。また残る1ヶ所については昭和53年度内に発掘調査が行われる予定である。

近年二戸市周辺における考古学的発掘調査は二戸バイパスに関係する遺跡の調査が続けられ多大の成果をあげられており、考古学、地質学等の面において多くの事実が解明されて来つつある。また遺跡の西側には館址が存在し高台を形成している。また西側丘陵頂部には縄文時代前期の遺跡の存在が知られており、東側に並行して走る二戸バイパス予定地内には縄文時代から歴史時代にかけての遺跡が多数あり、この両者にはさまれた中間地帯にどのような遺跡が存在するか興味のもたれた地点でもある。

本遺跡の発掘調査に関しては岩手県土木部および二戸土木事務所の関係者の方々より多大の御協力を得た。ここに記して謝意を表する次第である。調査に関しては資材、作業員等の手配について二戸バイパス調査班より助力を得た。調査に参加、協力された東洋大学学生柳沼賢治氏および沢内秀夫氏他30名の地元作業員の方々、福岡高校、一戸高校の生徒諸君および一戸町教育委員会の高田和徳、桐生正一両氏は度々遺跡を訪れ、堆積土層等に関し多くの御教示をされた。これらの方々に対して心からお礼申し上げます。

本報告書作製にあたっては遺跡実測図、出土品の整理、復元、実測、墨入れおよび拓本等に関しては、高橋栄次、高橋良子、長沢トメ、高橋サキ、高橋寿子、佐々木美耶子、細川幸子、高橋悦子、横田広子、高橋ミヨ子、藤平ヨシノ、広瀬良子、泉川スギノ、瀬川ハナ、瀬川エイ子、高橋和子、佐々木武、川口甚一諸氏の協力を得た。また報告書全般にわたっては(財)岩手県埋蔵文化財センター職員で御所分室勤務の高橋正之、工藤利幸、高橋与右衛門の協力があつたことを記して謝意を表する。

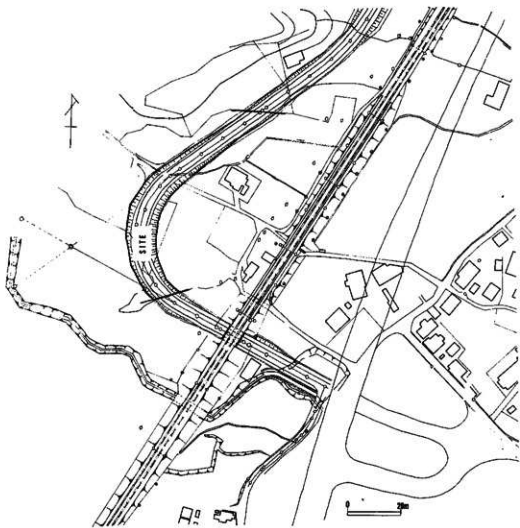
なお、本遺跡に対する発掘調査および室内整理、報告書刊行に至るまでの作業は一貫して上野が責任者として行った。

Ⅱ. 遺跡の位置と環境

二戸市は岩手県庁所在地盛岡より北へ約70km、青森県境に近い県北部の町である。県北中央部の中山峠より発し、東西の山脈をゆるやかに縫うように蛇行する馬淵川に沿って発達した町である。市の中心部は馬淵川右岸段丘上にあるが、近年急速の住宅地の拡張によって左岸段丘上にも多くの住宅が建設されつつある。川の兩岸ともにわずかな巾の平坦面を有するのみで、すぐ東西の山地にかかっている。本遺跡は市の北端部にあたり、馬淵川の左岸段丘上にある。国鉄東北本線斗米駅の西50mほどの所である。また国鉄の線路のすぐ東側には二戸バイパスの建設が著々と進められている。遺跡は二戸市米沢字沢内および同市米沢字家ノ上地内にかかる約3,000㎡ほどの範囲でほぼ中央を斗米駅または市街地より西側丘陵地に向う道路によって切られている。遺跡全体の面積はおそらくこれに数倍するものと考えられるが、道路予定地内だけの調査に限定されたため、この面積となった。西側の山地より流れてきた小さな沢が南端部を区切り、北側は東に張り出した舌状台地にさえぎられた南面するゆるやかな傾斜地上にある。附近は水田及び畑地として耕作されている。

遺跡指定地内のほぼ中央を東西にのびる道路の北側が字家ノ上であり、南側が字沢内である。家ノ上地内はそのほとんどが水田化されている。沢内地内は道路より部分に平坦面がわずかに残されているが、それより南側にかけてはゆるやかな斜面で下方の水田から沢に向けて移行する畑地となっている。この畑地内より多量の土器片を表面採集した。道路予定地内には3ヶ所にわたって土器片の散布の濃い個所がみられたが、南側斜面にかけてがより散布状態が濃密であった。これはこの畑地内が遺跡の中心部にあたるのであろうと推定させるのに充分であった。

前にも述べたごとく本遺跡の周辺一帯には数多くの遺跡がある。これは地形的にみても東西を山地に区切られ、南北に細長い河岸段丘を形成しているこの一帯の特徴である。同一の遺跡地内に上下に2ないし3層にわたって各時代の遺構が重複して検出される場合が多い。二戸バイパス予定地内の遺跡はほとんどがこの状態であると言えよう。このような状況からみて本遺跡も同様のものであろうと推定された。なお、道路予定地より西側の高い部分にかけても土器片の多く散布している個所が見られた。



標圖 2 進路付近の地形

Ⅲ. 調査経過

沢内遺跡に対する発掘調査は昭和52年6月16日から3ヶ月間の予定で開始されたが雨天等のため約16日間の延長を余儀なくされた。本遺跡の調査を開始した時点では遺跡指定範囲内に未買収地および買収済みの畑の一部に未だ作物の取り入れが行われておらず、この部分をのぞいて調査を開始せざるを得なかった。ために東西にほぼ中央部を横切る道路の北側の水田部分と南側斜面末端部にテスト、トレンチを入れ、遺構、遺物等の存在を探ることにした。この結果道路北側の水田部分(家ノ上地内=NⅠ、NⅡ地点)には中振浮石層下の黒土層、また一部分は南部浮石層中に達するまでに水田化するための整地が行われており、若干の縄文時代および歴史時代の遺物が散在したのみで遺構の存在は認められなかった。発掘調査に先立って分布調査が行われた際には土器片等の遺物散布が比較的濃い状態で見出されたのであるが、調査の結果は水田耕地化された際に攪乱されたものと推定し得る。

南端部に設定したテスト、トレンチからは多くの河原石の密集した状態のものが検出され、また土器等も多量に出土した。この地点(SS・SN地点)では耕作土が極度に薄く5~10cmですぐ褐色の砂質土層になる。この砂質土層上面一面にこぶし大から直径30cmほどの礫群が検出され、あるいは配石などの遺構の存在が推定されたため、全面発掘を行うこととした。7月12日になって予定より2日おくれて南側斜面部分の麦畑の刈取りが終了。ただちに発掘区SW、SEⅠ~Ⅳを設定して調査を開始した。その結果SWⅡ、Ⅲ地点より遺構を検出し、その性格確認のための調査に全力をあげた。この地点より住居跡群の存在を確認した。

並行してSEⅠ~Ⅳ地点の調査も行ってきたが、SEⅡ地点内に土壌3ヶ所を認めたのみで他に明確な遺構は存在しなかった。

8月5日SE、SW0地点としたササゲ畑の刈り取りが行われ、さっそく表土層の除去を行った結果、巾5mにおよぶ濠状の堀込みを検出し、あわせて調査を進める事とした。SWⅡ~Ⅲ地点にわたって検出された住居跡は切り合いの連続であり、また後世水路として利用されたような溝状の掘り込みなどがあり難行した。特に道路西より部分では検出した遺構の半分が道路用地外に入っていたりして完全な形でとらえる事が出来なかったものもある。また南側に行くに連れて傾斜が急になり、遺構の一部を残すのみで全体を知ることが出来なくなっている状態であったが、竪穴住居跡と考えうるもの8棟、石組伊および焼土の推積等により、住居跡が存在したと思われるもの4ヶ所および土壌4基を調査し得た。また濠状遺構も部分的に通路として残した他は掘り上げることが出来たのは9月中旬になっていた。なお、土木事務所よりの要請により、濠の部分および土層観察のための深掘り部分を埋めもどし、実測、写真

撮影等全ての作業を終了したのは9月30日であった。

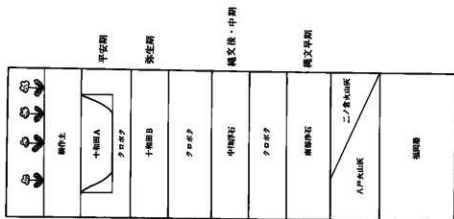
IV. 基本層序

本遺跡をはじめ二戸市周辺における土層堆積の基本的な層序は図3-A、Bに示した如くである。言うまでもなく図3-Aに示したものはあくまで基本的なものであって各遺跡の所在する場所、地形及び後世の擾乱等によって層の堆積の厚さ等に変異がある。

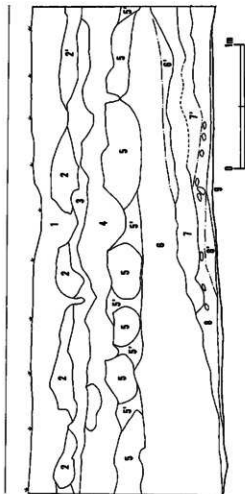
一般的に現地表面を形成する黒褐色土層は耕作により擾乱を受けている部分とそうでない部分とがある。この黒褐色土層中に灰白色もしくは青白色を呈する火山の層が存在する。これが十和田火山灰である。十和田火山灰はA、Bの二層に分けられる。上層のものを十和田A、下層のものを十和田Bと呼び、十和田B火山灰は青みが強い。ただこの十和田火山灰層は遺跡全体に広く明確に層を形成して存在している地点は少なく、二戸バイパス関係の遺跡に見られる如く黒褐色土層中に掘りこまれた遺構中に厚く堆積しているのを見るのが普通である。これが遺構検出面を形成している。十和田火山灰層を含む黒褐色土層下に通称アワズナと呼ばれる中坩浮石層の堆積がある。淡黄色または、くすんだ黄色を示す直径1~3mmほどのサラサラした浮石層である。この浮石層の下に黒色土層が50cm内外堆積しており、ついで濃いオレンジ色の粒の粗い南部浮石層に移る。オレンジバミスもしくは地元でゴロタと呼ばれるのがこの層である。さらに褐色の火山灰層である八戸火山灰が下層に堆積している。明確ではないが南部浮石層と八戸火山灰との間に、所により二の倉火山灰と呼ばれる層の堆積がみられる個所もあるようである。そしてさらに下層には福岡層の厚い堆積がある。

これら各層と考古学的遺構、遺物の検出される層との関係が現在までの発掘調査、特に二戸バイパス関係の遺跡の調査によりある程度とらえられている。前述した如く、十和田A火山灰層の堆積により検出される遺構の存在が知られるが、これは歴史時代—平安期の土師器を伴う住居跡等を示すメルクマルとなっている。十和田B火山灰の堆積は弥生時代の遺構の存在を示すと考えられる。これら十和田火山灰層を含む黒褐色土層下部から中坩浮石層にかけては縄文時代晩期、後期、中期の遺物の包含層とである。中坩浮石層中に切りこんで、これらの時代の遺構が検出される。さらにその下層の黒色土層から南部浮石層下部までが縄文時代前期および早期の遺物包含層である。(挿図3-A、B)

本遺跡においては遺跡中央部での土層断面の観察によれば図3-Aの如くである。後世の擾乱により極く一部分をのぞいて十和田火山灰、および中坩浮石層の存在はみられない。この事は西側高台に築かれた館址との関係を考える必要があると考えられる。館を築くにあたって盛土削平が行われ、おそらく上層部分が削りとられたものと見られよう。また遺跡の立地状況か



3-B



3-A

1. 暗褐色土層(中間浮石を含む)
2. 黄褐色=中間浮石層
3. 暗黄褐色土層(中間浮石を多く含む)
4. 黒褐色土層(中間浮石と黒部浮石を若干含む)
5. オレンジ浮石層=黒部浮石層
- 5'. 暗褐色土層(黒部浮石を多く含む)
6. 暗褐色砂質土層
7. 暗褐色砂層
- 7'. 黄褐色砂層(砂粒粗)
8. 褐色砂層
- 8'. 黒褐色砂層
9. 黄褐色砂層

挿図 3 A 層序模式図
B 基本層序

らして南側を流れる小さな沢に向けて斜面となっている点、その沢がやや西から流出して一種の舌状台地のような地形を示すために遺跡南端部では南部浮石の堆積もみられず、沢によって形成された礫層が露出している事実がある。また極く新しい時代に入って沢部分を埋め立て水田化した際、多くの土がこの遺跡部分からとられたであろう事を推定するのは容易である。

本遺跡の土層堆積も図3-A、Bに示した基本層序模式図と基本的な変化はない。ただ遺跡の立地の項で述べたように、地形的条件および人為的条件によって堆積土層の形体、厚さ等にわずかな変化がみられる。図3-Aは遺跡のほぼ中央を走る道路から南側の斜面上端部SE、SWOとSE、SWIの境界線の東西断面図である。第1層は耕作土及び下部にうつるにしたがって、中振浮石層を含む暗褐色土層である。第2層および2'層は中取浮石を多量に含む暗褐色土層である。この地点では中振浮石層が平坦な堆積をなしておらず、ブロック状に残存している。これは1'層としたやや褐色土の強い土層（第1層より多く浮石を含む）が後世耕作その他の攪乱によって上層の暗褐色土と浮石が混在したために生じた層であると考えられる。第3層は上部に中振浮石を含み、下部に小粒の南部浮石を含む黒褐色土層である。その下層第4層は、ほぼ全体に大粒の南部浮石を含む黒褐色土層である。第3層および第4層は中取浮石層と南部浮石層の間にある黒褐色土層であるが、両浮石層を共に含んでおり、単純な黒色のみの堆積はみられない。第5層と5'層ともに元来は南部浮石の堆積層であったと考えられるが、堆積中もしくは堆積後になんらかの自然の現象による結果にこのようにブロック状の南部浮石層堆積が残されたものと考えられる。5'層は暗褐色の砂質の土層のように観察される。

第6層は暗褐色の砂質層とみられるが、いわゆる八戸火山灰を多量に含む層であるし、この層を形成する堆積土が5'層のものと同じのものであるようだ。

第6'層は色調においては第6層とほぼ同一であるが、第6層に比較して砂質性が強く、粒子も粗い。第7層、7'層ともに黄褐色の砂層である。7'層が前者に比較して砂粒が粗く、かつ小さな礫を含んでいる。第8層、8'層ともに黒みの強い褐色（暗黒褐色）の砂層であり、第8層にはこぶし大の礫を多量に含んでおり、一部分では礫層としてもよいほどである。8'層には礫の量が上層に比して少ない。第9層は褐色を呈する粗砂の層である。

以上のように層序模式図とは層序の順位に変化はみられないが、この地点においては西南もしくは西方向にかけて下部の砂礫層の傾斜が明らかにみられる。この傾斜が単に地形上の変化のみを表わしているのか否かは、この部分だけの土層観察のみでは明らかでない。

また第4層上面に焼土の掘りこみ堆積がみられたため、住居跡等の存在を推定したが、図に示したごとく明確な掘りこみを確認できなかった。

V. 遺 構

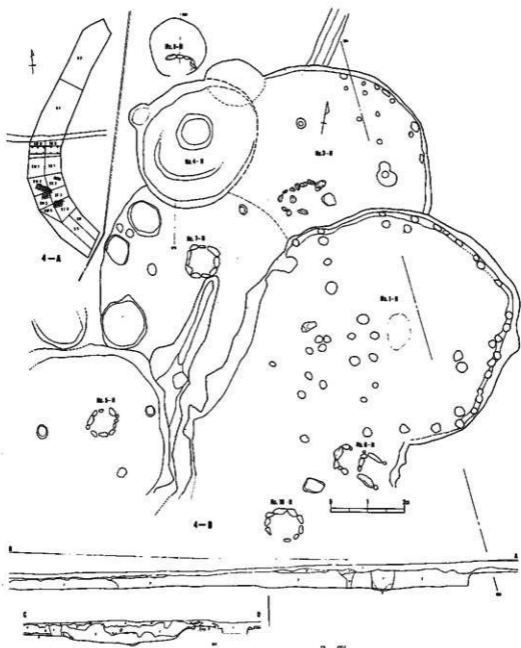
(1) 住居跡

縄文時代の竪穴住居跡8棟、石組炉の存在により推定した住居跡と考えられる箇所4、計12箇所と土壌4基、単独の埋設土器2箇所および漆1箇所を検出した。住居跡のうち、5棟はそれぞれ切り合ってSWⅡ～ⅢとSEⅡ～Ⅲ地点にかけて検出された。土壌4基もまたこの地点内から検出された石組炉1箇所と共に発見されている。他の3基はSEⅣから石組炉1箇所と共に発見された。埋設土器は住居跡群よりやや南よりのS地点内より一面に検出された礫群の中にあつた。漆状遺構はSE、SWO地点から調査地内を横ぎるように東西に走っていた。遺構は遺跡南側のみ集中しており北側N1、N2地点からは何ら検出されなかった。分布調査時は土器片の散布が濃くみられた箇所も調査の結果水田化する際の攪乱により、地表面にてたものであることが判明した。

SE、SWⅡおよびⅢ地点より検出した住居跡群についてのべる。この地点よりは5棟の竪穴住居跡が切り合いの状態で見出された。(挿図4-1B)

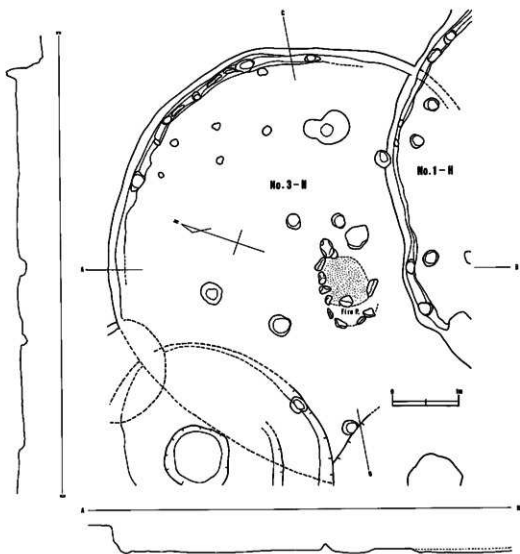
第1号住居跡とした円形のは明確に壁をといひ得たのは約半分である。そのうち遺構検出面と思われる層から確認出来たのは50%ほどである。南側の一部に南部浮土層の盛り上がりがあり、この面から北側の斜面にかけて精査したところ、暗褐色土層中に黒色土の落込みがみられ、ここの部分が住居跡の壁の上端部であった。北よりは後述する第3号住居跡によって切られており、西部分は他の住居跡によって同様に破壊されていた。直径8mほどのほぼ円形を呈すると考えられる。壁直下には柱穴と考えられる小さなピットを伴った溝がめぐらされており、ほぼ中央に焼土の堆積がある。主柱穴と考えられるものが3ヶ所焼土を中心として存在した。床面は南部浮土層上面に薄く暗褐色の土をしいたらしく、一面にやや硬い層がみられた。この住居跡の床面上に図3-8に示した粗製深鉢が底部を上にして倒立した状態で発見された。内部に何らかの他遺物もしくは骨などの有無を確かめるために注意して取りあげたが、内部からは何んの遺物も発見出来なかった。なお、すぐ近くから同様な大形の粗製深鉢が発見された。

第3号住居跡、この住居跡は第1号住居跡のすぐ北よりに掘りこまれたもので、第1号住居跡を切って作られたものである。石組炉を伴う。北側約3mほどの壁を残すのみで南側部の立上りは明確にとらえられなかったが、第1号住居跡の床面上に張り床してあったため、張り床部分の広がりからと炉を中心として考えると約直径6mほどの円形を呈すると考えられる。周構は小柱穴を伴った極く浅いものが一部分に認められるのみである。大小9個の河原石を使った

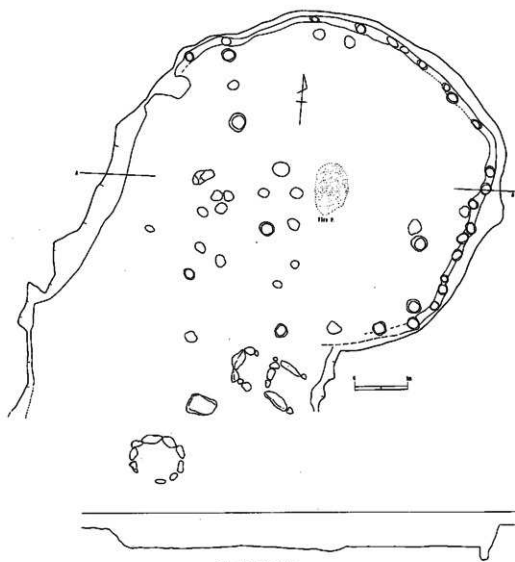


- 凡例
- 1、 黑色土層
 - 1'-1" 黒褐色土層(中挿凍石を含む)
 - 2、 暗黒褐色土層
 - 3、 暗部浮石層
 - 4、 暗褐色砂質土層

挿圖 4 A B 遺構配圖



棟圖 5 住居跡 1



挿圖 6 住居跡 2

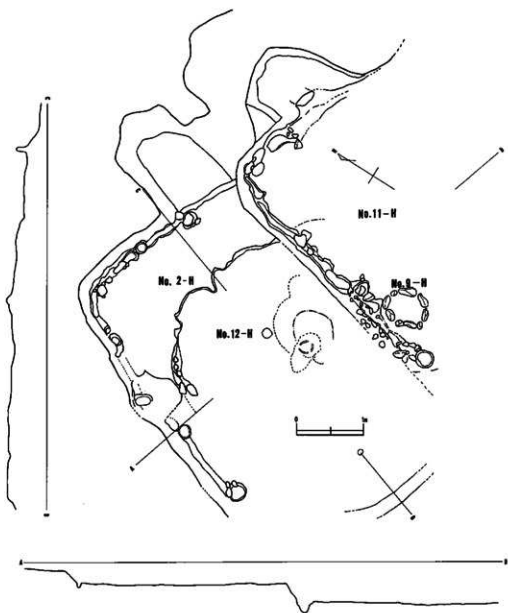
石組炉がある。炉は円を圍くように配置されている。この部分にも極く薄い焼土の小ブロックが散見された。この住居跡は第4号住居跡としたものと土壌によって完全に切られている。

第4号住居跡、第3号住居跡のすぐ西側において、第3号住居跡の一部を破壊して掘りこまれたものである。壁は垂直に立たず、なだらかな傾斜を呈している。途中に1段肩を有する様な形である。中心部と考えられる場所には直径80cm、深さ5cmほどの浅い掘りこみがあり、全体の形状は深い西洋皿のような感じである。柱穴も検出されなかった。また焼土の堆積も部分的に散在するのみで、その他炉と考えられるような痕跡も認められなかった。住居跡とするよりは掘込み状遺構と呼ぶほうが良いかもしれないが、皿状に凹んだ床と思われる部分は以外と硬くしまっている。長径 3.5mのやや楕円形を呈する。

第5号住居跡、SWⅢ地点のもっとも西より道路予定地外にのびている状態で検出された。やや方形に近い形を呈している。4m×4mほどの大きさであると推定されるが、用地外にのびている部分が確認できないのと、南側の斜面に向っている部分が破壊されているために正確な大きさは不明である。石組炉が北東部の角よりに発見された。周構は確認できなかったが、炉の近くから柱穴3ヶ所を検出した。本住居跡の西より部分より挿図10-2に示した壺形土器が図3-9に示した大形粗製深鉢の中に入れられた状態で発見されている。出土層位は床面より20cmほど上の黒褐色土層中であり、深鉢は底部を上にしてあたかも壺形土器のうえにかぶせたような形で出土した。この部分に特別な土壌等の存在を考えて精査したが、確認出来ず住居の一部におかれたものかとも思える。なお、土器内からは特種な遺物は検出されなかった。

第7号住居跡は本住居跡も壁の一部を残すのみで、全体は不明である。石組炉を伴う。石組炉のすぐそばから図8-2に示した脚付石皿が底を上にした状態で検出されたが北方から第3号住居跡の中央部を買って後世掘りこまれた水路と考えられる溝が炉のすぐわきを通り、炉より南部分にかけては下層の南部浮石層を盛り上げた様な状態で走っているために床面も破壊がひどく明確にとらえ得た部分は少ない。また西より部分の壁も浅い皿状の掘込み等によってこわされ、はっきりした立ち上りは確認出来なかった。

第6、8、10住居跡はこれら3個所の住居跡はプラン、床等すべて明確なものではない。単に石組炉の存在によって床と考えられるレベルをおさえたのみであり、便宜上住居としたものである。特に第6号石組炉(住居跡)は第1号住居跡の壁近くであり、南部浮石層の盛り上りがすぐわきにある。しかしこの炉は中心と考えてみると挿図4Bの断面にみられるように、第1号住居跡の建築者が南部浮石を使って壁の一部を作ったと考えれば直径4、5mほどの範囲をこ炉を伴った住居跡が存在した場所として考える事も可能である。特に炉の形が他のものと異って複式炉的要素の強いものであるなど、また附近から中期末から後期等の土器片が得られている。この炉を含む土層は、第3及び第4号住居跡の床面とは25cmほど高い位置にあり、黒



柳園7 住居跡3

褐色土層中に存在した。

第10号石組炉（住居跡）は完全に石組炉のみの検出である。床と思われる層は暗褐色の砂質土層であり第5号、第7号住居跡のものと同様である。この炉は地表面より10cmたらずの深さの所にあり、周囲には小さな礫が多く存在する。第5、7号住居跡と共にその一部分もしくは大部分を洪水等の自然災害によって破壊されたものであろうか。

次いでSE、SWⅣ地点検出の住居群について述べる。この地点からは方形2棟、円形のもの1棟が検出され第2、9、11、12号住居跡とした。

第2号住居跡はSWⅣからSWⅣ地点にかけて検出された方形の住居跡であり、約3mが確認された。北東に向けて作り出し状の部分をもつが、この部分は浅い掘りこみである。約10～15cmの壁が立ち、直下に小穴を伴う溝がめぐっている。床面は第5、7号住居跡同様暗褐色砂質土層であるが、そのうえに小礫群の堆積がいちじるしく見られ、床面は、はっきりと確認することが出来ない。現在するのは3m×2.5mほどの範囲であり、中央と思われる位置にわずか残っている。埋設土器と考えられる土器片が存在したが、復元しえない状態であった。周囲に焼土の薄い堆積と浅い掘りこみらしきものがある。

第11号住居跡 第2号住居跡を半分破壊して掘りこまれたもので、形状および残存部位とも第2号住居跡とほぼ同様である。

第9号、第12号住居跡 第9号住居跡は第11号住居跡の西壁上面に近い所にあった石組炉を中心として考えたが、あるいは第2号住居跡内に浅い掘りこみを残すほぼ円形を呈する第12号住居跡の炉とも考えられるものであるが、わずかにレベルが異っている。

以上住居跡群について略記してきたが、これら住居跡の新旧関係を見てみると次のようになる。SE、SWⅡ-Ⅲ地点のものについては、掘りこまれた高低差や張床などからみて、第6号炉をもつものももっとも古く、次いで第1号住居跡が作られ、その床に張床して第3号住居跡が存在する。それを切って第4号住居跡が掘られている。第4号住居跡は第8号住居跡も切っているが、第3号住居跡と第8号住居跡との直接の新旧関係は不明である。第5号、第7号とでは第5号住居跡が第7号住居跡を切っているため、第5号の方が新しいと思ってよい。

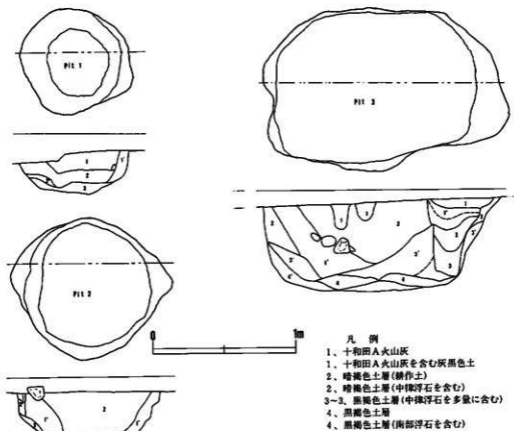
第7号住居跡と第1、第3号住居跡との関係は明確にとらえ得ない。いずれにしてもきわめて短い間の切り合いと考える事が出来よう。

SE、SWⅣ地点のものについては第2号住居跡より、第11号住居跡が新しく、さらに第12号住居跡がその後と考えられよう。

(2) 土 壙

SEⅡ地点より3基検出された。（挿図8-1～3）直径1.8m、短径1.2mほどの長円形

のもの1基と不整形な円形を呈する径1mおよび1.3mほどのもの各1基である。掘りこみは垂直に近いもの（Pit-3）と浅いゆるやかなもの（Pit-1）とがある。Pit-3の埋土断面には柱穴状のものと比較的大きな掘りこみがみられるが、この掘りこみ上部の埋土は十和田A火山灰をまじえた土が堆積している。このことからみてこの土壌群が埋まってから後に何らかの掘りこみが作られたとみられるが、周囲一帯にはこれに附随すると思われるような遺構は散在する小穴が数個あるのみで、はっきりした形をとるものは存在しなかった。埋土層中よりは数片の縄文土器片が発見されたのみで、他に何ら遺物はなかった。発見された土器片よりみて縄文時代後期のものかと推定されるが明確な時代判定はさけない。



挿図 ■ 土坑

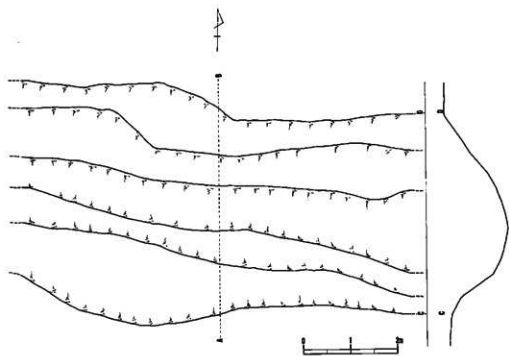


插图 9A 溢平面图

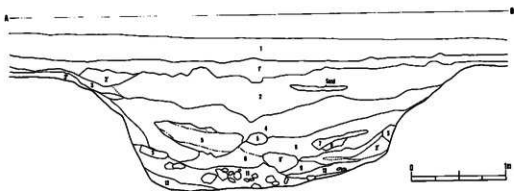


插图 9B 溢土层堆积图

(3) 濠状遺構

SE、SWO地点に東西に走る巾5mほどの溝状遺構が検出された。調査の結果、深さ1.6mから2.0mにわたる深さをもった濠状遺構である事が確認された。濠は平均的な巾5.3mで、ほぼ東西に走っている断面の形は北側は比較的なめらかに底に向かって落ちているが、南側の一部に途中地表面から50cm～60cmの深さで明らかに段のつけられた箇所が認められた。全体的には途中で二段の層があり、底部にもわずかであるが角のあるようにみうけられる。濠内の土層堆積は底部近くで砂と砂礫層および礫層の互層となっている。両側には南部浮石層のくずれ落ちたものがあり、中央部分は南部浮石を含む黒色土層が堆積している。この濠がどの時代に属するのか遺物の出土が全くないため判明しないが、本遺跡西側の台地上に館址の存在が知られているため、あるいはこの館址と関係あるかもしれない。

VI. 遺 物

(1) 土 器

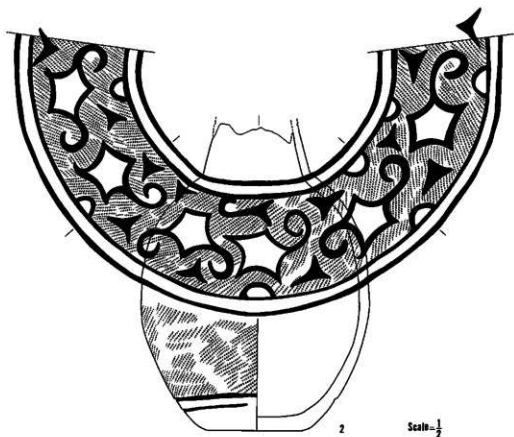
本遺跡からは総数24,788片の土器片が出土した。そのほとんどが縄文時代のものである。わずか2～3点時期不明の小破片があるのみである。縄文土器片の時期は多様にわたっており、早期から晩期の終末期のものまで出土しているが量的にもまた遺構との関連からみても後期、晩期が圧倒的に多量である。ただし完形もしくは準完形のは少なく、わずか数点のみであるが、図上復元し得たものは265点におよぶ。本報告書にはその全てを収録し得ないため各時期の代表的なもの、のみにとどめた。これら20,000点を越える多量の土器片はそのほとんどがSE、SWⅡ～Ⅳ地点の中に集中して発見されたし、特にこの地点の遺構埋土中よりの出土であり、層位的に明らかに逆転しているものが少なくない。的確に出土層位をつかみえたのは晩期の土器群の一部のみである。中期および前期の土器群は極く一部をのぞいて出土層は第二次堆積層中からのものである。基本層序の項でも述べた如く、本遺跡を含むこの地方一帯は堆積した火山灰、浮石等の層位と各文化時期が合一する性格を有しているが、当遺跡の如くは堆積層が欠如していたり人為的また自然的攪乱をうけて堆積層が薄いためにわずか10数cmの中に各時期の土器が混在する様な現象が起っている。このために層位的に時期分けは出来得なかったが出土土器の参考として各期のものについて紹介する。

第Ⅰ類土器

早期のものと推定される土器片は極く小破片であるが、数点出土している。中に縄文のみのものと貝殻土器の破片かと思われるものがあるが、いずれも南側斜面部分よりの出土で明らかに水に洗われた痕跡をとどめており、明確に時期判定するには無理のあるものである。

第Ⅱ類土器

図版1-1～3までに図示したものであるが、いずれも復元実測である。折りかえし口縁を有する深鉢形土器(1-1)は南側斜面の北よりSN地点より発見されたが裏面を上にして全体の約半分のみが残存していた。また1-2の土器片もSS地点よりの出土であるがいずれも検出されたのは黒褐色土層下部であり、同時に晩期に属する埋設土器写真8-2の検出面であり、附近には後期の土器片も多量に散布されていた。図1中のその他の土器はほとんどがSE、SW1、Ⅱの地点に集中している出土層位は基本層序の第3層から4層にかけての層である。SE、SWⅠ地点は遺構がほとんど発見されず、これら古いと思われる土器の包含層がわずかに攪乱をうけず残された様であるが、土器の量は少ないし、また散在して発見されている。図



第10圖 繩文土器

1-6は胎土中に多量の繊維を含んでいる。

第Ⅲ類土器（図版1-4~8）

ここに分類した土器群の出土層位は第3層にあたと考えられる。SWⅢ地点内より発見されているものが多い。波状口縁を有するもの、4ヶ所の尖起をもつものなどがある。文様は沈線で曲線に区画した中にも縄文を残し、他の部分を磨り消している（図1-4、5）。他にカギ状の区画を作っているもの（図1-8）などである。器形は深鉢小形のものである。

第Ⅳ類土器（図版2-1~6）

この類の土器は大形と小形のものに分けられる。小形のものとしては数個体のミニチュアのもの存在する。また器形も多様してくる時期のものである。コブ付きで曲線で弧を組合せ、さらに直線でアクセントをつけた刺突文を有するもの、直線の区画で文様を表わしたのも、それらと縄文の組合せとしたものなどがある。図2-3は浅鉢形台付土器であるが、縄文を地文としてうえに隆起帯による曲線文様が画かれている。者は浅鉢形、深鉢形、壺形等各種である。また台付土器で図2-3と同様に台の部分に切りこみのあるものが出土している。挿図10-1に図示した土器はおそらくは他の土器のフタと考えられるものである。両面ともに磨かれており、下部には小さな刻み目がぐるりとつけられており、じかに地上等におかれたような痕跡はみうけられない。

第Ⅴ類土器

図版2-7~11、図版3-1~9挿図10-2に示したものである。すべて縄文晩期に属する精製土器と粗製土器である。図3-2~4のものは浅鉢形、壺形および台付土器であり胎土、焼成ともによく、また磨かれている。図3-2、3は赤色研磨がほどこされている。巾広の底部U字形をなす沈線で、直線とゆるい弧を画き各区切りの場所に心尖起がつけられている。図3-2は器台であるが、皿部の一部を残すのみであり、下部も欠損しているが、図3-2、3の土器と同時期のものと思われる。図2-7~10の浅鉢形土器および深鉢形土器の口縁部近くには羊歯状文の施文がみられる。

粗製土器は大形で縄文のみのものがほとんどである。

以上、第Ⅰ類から第Ⅴ類まで略記してきたが、時期別に分類すれば第Ⅰ土器は縄文時代早期末の頃に比定されよう。第Ⅱ類土器はおなじく前期に第Ⅲ類は中期末のものと考えられる。第Ⅳ類土器は後期中葉であろうし、第Ⅴ土器は晩期初頭と晩期末に比定される。前途の如く極く一部を除いては層位的な差異を明確にしえないが、土器を分類すればこのようになると思われる。土器形式からみれば、早期を除いては大木7a式、大木9式、十腰内工式、大洞B式、B C式、C I式、C 2式およびA-A'式が存在する。

(2) 土偶および土製品

土偶は破片のみ4点出土した(挿図11-6~9)。三角形を呈する顔面部と前方にのびた様な形の頸部を有し、刺突および張付によって目、鼻、口を表現しているものが大小2体がある。大形のは顔面部から後頭部にかけてゆるやかに弯曲し後頭部は大きく突出している。小形のは頸部と顔面部が急角度に曲折しており頸部も短い。他の2点は脚部と肩の部分である。脚部の半分のみ残存しており斜めに小さな穴が貫通している。これは大形の顔のものと同様の焼成、胎おであり、文様もよく似かよった手法でつくられており、おそらくは同一個体と考えられる。肩部のみのものはやや太い沈線によって区画された中に円形の小さな刺突があり、縄文が付けられている。

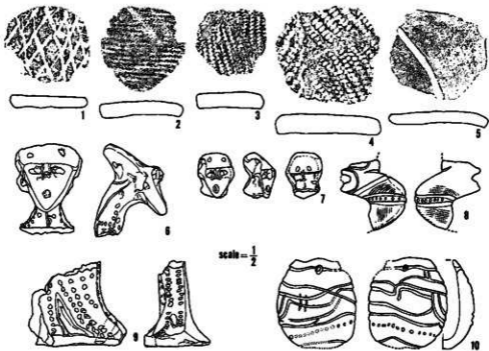
挿図11-10に示したものは土製品としてよいか、土器の方が良いか判断にまようものであるが内部の整形が粗く一種の飾り物ではないかと思われる。口縁直下に対称的に穴がうがたれている。

他の土製品としては円盤形土製品がある(挿図11-1~5)。土器片の周囲を打ち欠いたりすったりして円盤形を作り出している。おそらくは土鍾として使用されたものであろう。使われた土器片を観察すると縄文時代後期のものが多いように見られるが出土層位、地点とも一定せず明確な時期決定はない。

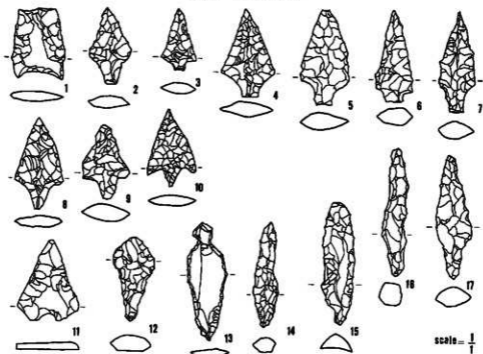
(3) 石器

石器の出土数は若干名の加工痕および使用痕のみられる石片類を除き明らかに石器として加工されたものが141点発見された。その内訳は次の通りである。

石 鏃	33
尖頭器	4
石 碑	28
スクレーパー	7
石ベラ	4
石 錐	9
石 錘	9
石 斧	28
凹 石	9
磨 石	12



神圖11 土偶及土製品



神圖12 石鏃・石匕・石鏃

石皿	3
その他	4

石器類はそのほとんどを図化し収録したが、同一種のものは代表的なもののみにとどめた。

石 鎌 (図4-1~17、挿図12-1~11)

図示した如く石鎌の形態は大別して2種類に分けられる。

a. 非常に小形のもので三角形を呈し、柄がつけられているもの。大きさは1cm~2cmほどであり両面とも細かく加工されている。柄の形には両側に挟り込みがあるもの、ゆるやかなカーブを画いて作り出されているものなどがある(挿図12-2~10)。

b. ほぼ二等辺三角形に近い形のものである。先端部は鋭利に作り出され、基部は薄く平坦に加工されている。若ずかに基部に挟り込みのみられるものも存在する(挿図12-1、図版4-1~3)。

c. b同様二等辺三角形に近い形であるが、基部に挟り込みを有する。先端部は鋭く作りだされたものと、ゆるやかなものとある。長身のものと同身なものもあるが、両側の縁はほぼ対象に作られている。基部の挟りは深くない(図版4-8、10~15)。

d. 身長に比し巾が広く木葉形もしくは菱形を示す石鎌である。両面の加工は他の類に比して粗雑である(図版4-9、16)。

e. 比較的大形のものであり、基部近くの両側に挟り込みがつけられている(図7-4)。

f. ほぼ三角形を呈し基部に大きな挟り込みの有するものである。基部両端の作り出し部分を欠損しているが、おそらく燕尾状に広がるものと思われる(挿図12-11)。

g. 細身で長い鎌である。左右からの挟り込みが極くわずかにみられるのみで両側はゆるやかな弧を画いている。(図版4-5~7)。この類に分類されるが非常に小形のものが1点ある(挿図15-17)。

他に1点図4-17に図示したものは比較的大型のものであるが、両面ともに大きな剝離痕を残しており、細部加工も完全ではないので、おそらく石鎌としての加工途上にあるものと推定される。

尖頭器

わずか4例のみの出土をみた。長身で両側がほぼ並行に直線を示すもの図4-19とゆるやかに弧を画くものがある。(図4-20、21)。ともに肉厚ではあるが両面ともに入念に加工されている。図4-20に示したものは石ペラとも考えられるものであるが、一般に石ペラと呼ばれるものは一方が平坦もしくは内側に彎曲しているが、この石器は断面にみられるように両面ともに張り出しているため尖頭器として分類した。他の1点は図4-18に示したものであり、ほぼ身長半分の欠損しているが、形態は胴部中央が左右に張り出した弧を画くような形をとり

身長に比して巾のある木葉形とも云える形態をとりなすもので、中央部の断面は他の例に比して厚い。

石 ヒ

完形および破損品ともに石ヒと認められたものは28点出土した(図5-1~28)。形態的には縦形と横形に分けられる。

a. 縦形で三ヶ月形を示すものである(図5-1~4)。石器の横断面はほぼ正三角形に近い形をなし肉厚である。全体に大きく弯曲し、先端部も鋭利に作り出されている。正面は細かく左右より加工されているが、裏面はつまみの部分と刃部に若干の加工もしくは使用痕がみられる。のみで、ほぼ全面にわたって第1次剝離面を残している。

b. 縦形の石ヒであるがa類のような細かい加工は左右の刃部のみに加えられ、つまみ部分の加工も入念ではない。正面には大きな剝離面を残している。刃部の加工は左右両側にあるもの(図4-5~10)向っては右側のみ行われているもの(図5-11, 12)左側にのみ行われたと思われるものなどがある。また挿図12-13に示した如く小形のもの1例が存在する。

c. 横形のものである(図5-13~16)。この類のものは縦形のものに比して薄い剝片を利用しており、刃部も下方のみつけられている。あまり入念な加工はほどこされていない。つまみの作り出しも粗雑である。

上記の分類に入れられなかったものが数点あるが、それらは縦形のもの未成品と考えてよいものである。わずかつまみ部分を作るための加工と右側刃部に若干の加工がみられるのみである。つまみ部分のみの欠損品であるが2点ある。1例は横形のもの、他の1例はつまみの加工からみておそらくa類のものであろうと考えられる。

スクレーパー

明らかにエンド、スクレーパーとみられるものが4例出土した(図5-17~20)。全て肉厚な剝片を利用しており、先端部は急角度に傾斜して入念に加工され刃部を構成している。ただし、図5-17~20は両側もしくは一方の縁にも加工が行われている。図5-21はサイド、スクレーパーに分類したが、薄い剝片に加工したもの、または断面が三角形の肉厚な剝片を使っており、あるいは石碑の未成品かと考えられる。他に1点欠損品であるために確実たる分類が出来ないが剝片の厚さ、加工の形態から見てスクレーパーの類と考えられる。また先端部の加工が粗雑ではあるが、加工部位からみてスクレーパーの中に分類したものもある。

石 ベラ

図5-22, 23に示したものである。すべて両面加工がほどかされており、下方先端部で裏面は内側にやや弯曲している。

石 鏟

挿図12-12, 14, 16に示したもので全て小形のものである。12は上端が巾広く攪りやすいように作られている。先端部は細く、こまかい加工がほどこされている。15を除いて他の2点は断面がほぼ四角形を呈するように加工されているが形は不成形である。

石 錘

扁平な河原石の周囲を打ち欠いて作られた石錘と考えられるものが9例出土した。全周囲を打ち欠いたものと一部に元の縁を残しているものがある。大きさは不整である。(図5-24-26)。他に2例その他として分類したが円盤形石器とも呼ぶものがある(図7-9, 10)。周囲を磨りあげてほぼ円形に近い形に仕上げたものである。両面ともにわずかではあるが磨きがかけられている。

石 斧

磨製、打製あわせて28例が発見された(図6-1-15, 図7-1-8)。これらのうち入念に磨きあげられた磨製石斧は小形のもの3例(図6-1-3を含む8点)である。他のものは完全な打製石斧2点(図6-15を除いてすべて半磨製と呼べるものである。このうち特徴のあるものとしては図6-13, 14, 図7-1, 2に示したものである。前者は片面に打ち欠きによる加工が加えられ他の一面は入念に磨かれている。石斧として考えるよりも他の物に対する研磨器もしくはスクレーパーとしての役目が強いように思われるものである。後者は図示した如く両端部に敲打によるとみられるような痕跡を明確に残しており、中央部は磨かれてゆるやかにびれを形成しているもの(図7-1)、および一方の端に打ち欠きによる加工の痕を残し、他方は敲打によるような痕跡を残しているものである。(図7-2)この2点は他にあまりその出土例をみない。また図7-6に示したものは断面図が三角形に近い形をなし、その2面に磨きがかけられている。他に桂化木を利用したものが3例ある。

凹石、磨り石

河原石を利用した凹石と磨り石計21点が出土した。凹石は片面もしくは両面にしない12ヶ所の凹みをもつもので、形態は円形の分厚いものから長円形の薄手のものまで種々様々である。(図7-11-13)。

石 皿

脚付の皿が2点(図8-1, 2)石皿として使用されたと思われるもの1点が出土した。前者のうち1点は第7号住居跡とした炉の近くから発見されたものである。4つの脚が作りだされている。両端の一部が欠損している。他の1例はほぼ半分だけ残っているものであるが、これも大きさからみて4脚のものであろうと思われる。石材とともに安山岩系の多孔品のものである。

そ の 他

石剣の破片と推定されるものが2点ある。うち1点を図6—16に示した。断面はほぼ円形を呈するが、中央部のみの破片であり両端部の形はうかがう余地もないが磨きが入念にほどこされており石剣の破片と考える。他の1点はもっと小破片である。

VII. ま と め

以上沢内遺跡の遺構、遺物について大略を記して来たが、本遺跡に包含されていた遺物は縄文時代前期から晩期に至るまでの長期間にわたるものである。しかしながら前期、中期および後期にすると考えられる遺構は明確にとらえ得なかった。わずかに第2、11号住居跡としたものが出土品の点数からみて後期のものではないかと考えられるのみである。これらにしてもこの時期の攪乱をうけており、混在する出土品の時期も後、晩期にわたっているために前述したごとく、その量的なものによつてうかがい知るのみである。

前期、中期についてはSW I地点の一部に攪乱をうけていない土層を認めたのみで、遺構として明確におさえられるものは検出しえなかった。

遺跡の中央部と考えられるSE、SW IIより南側SS、SN地点にかけての一带に広がる遺構群はすべて縄文晩期ののものであると考えられる。SE、SW II～III地点にかけての遺構で明確に時期判定をしようものは第1号住居跡が大洞C₂式期ののものであると言えよう。他の住居跡に関しては第5号としたものが同時期のものと推定しようのみである。出土品からみて大洞B式より大洞A'式までが存在するが、特に大洞AおよびA'式は南端部斜面の礫群中より検出されたものがほとんどであるために、この礫群中に大洞A、A'式期の生活の痕が存在したと考えるが、現状では住居跡等の痕跡を明確に認める事は出来なかった。

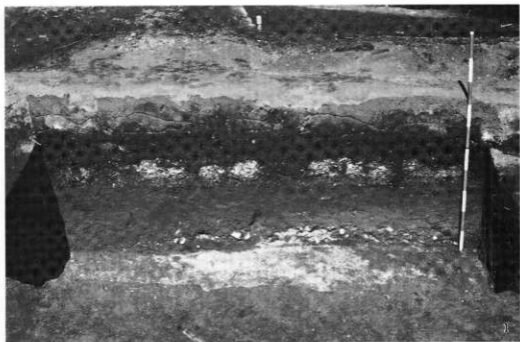
SE、SW II～III地点では前期、中期の遺物包含層をぬいて晩期の遺構が掘りこまれており沢内遺物の中心と考えられるのは縄文晩期の遺構、遺物であったと言える。



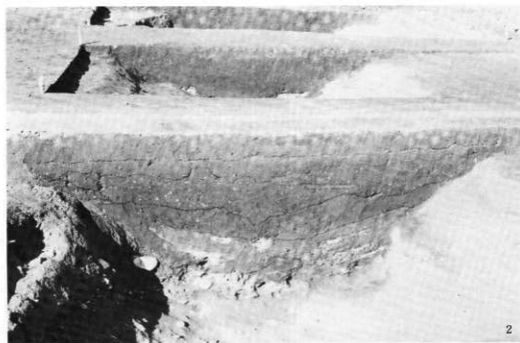
遠影



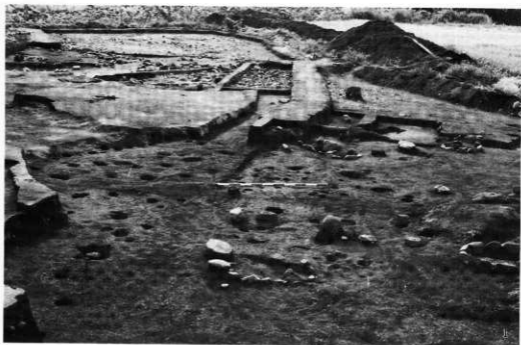
近影
写真図版 1



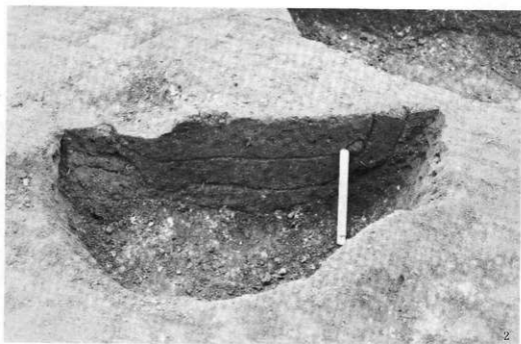
基本層序



溝断面
写真図版 2

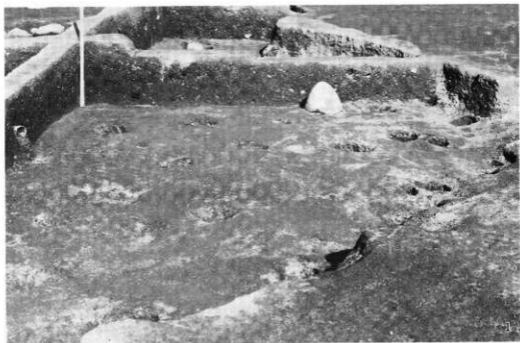


林出遺構-1 住居跡群



林出遺構-2 土坑

写真図版 3

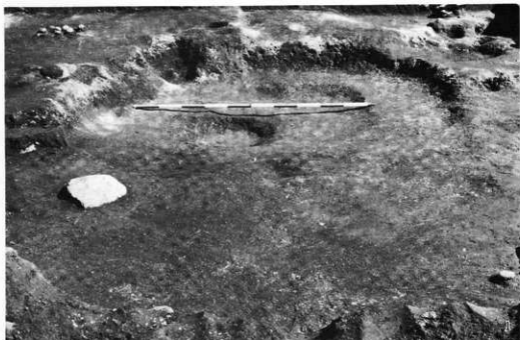


第1号住居跡(南より)

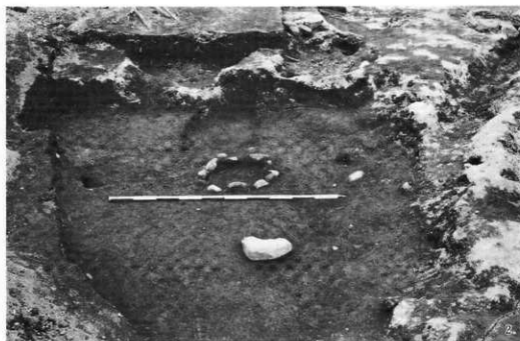


第1号住居跡(東より)

写真図版 4

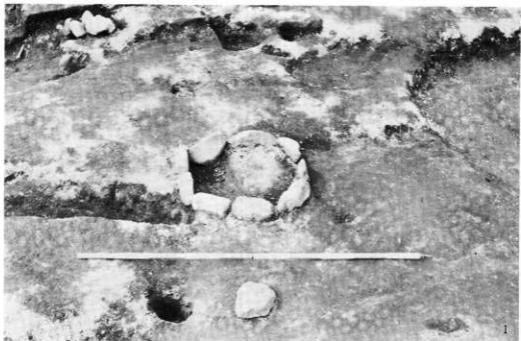


第4号住居跡

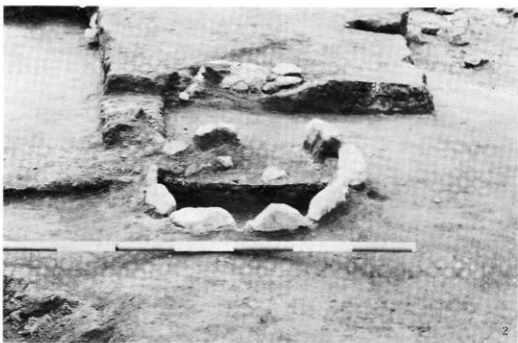


第5号住居跡

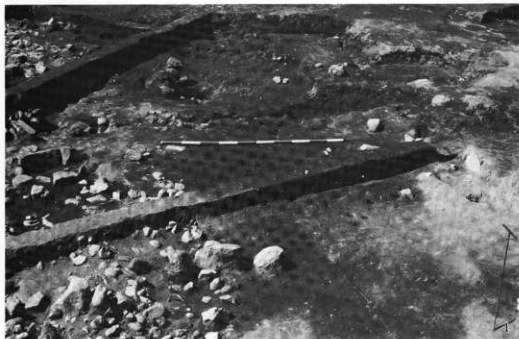
写真図版 5



第7号住居跡



第8号住居跡
写真図版 6



第2・9・11・12号住居跡

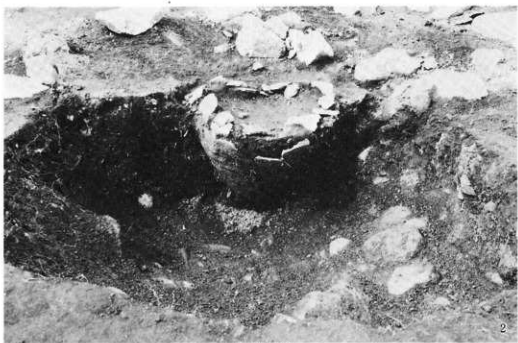


遺跡南端の礎部

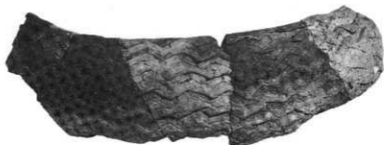
写真図版 7



1
土器出土狀態



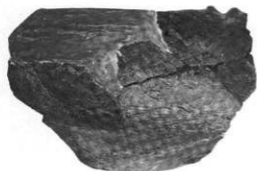
2
土器出土狀態
写真図版 8



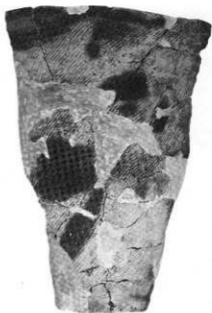
9-1



9-2

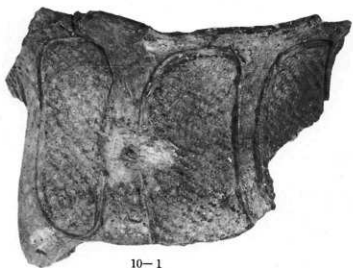


9-3



9-4

写真図版 9 縄文前期の土器



10-1



10-2



10-3

写真図版10 縄文中期の土器



11-1



11-2



11-3



11-5



11-4



11-6

写真図版11 縄文後期の土器



12-1



12-2

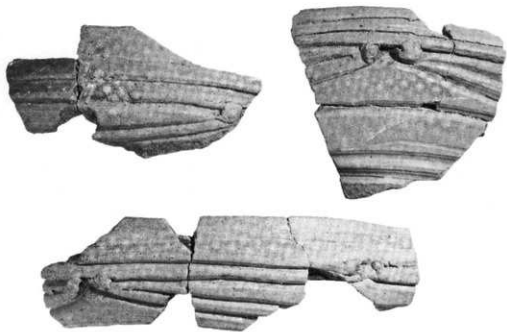


12-3

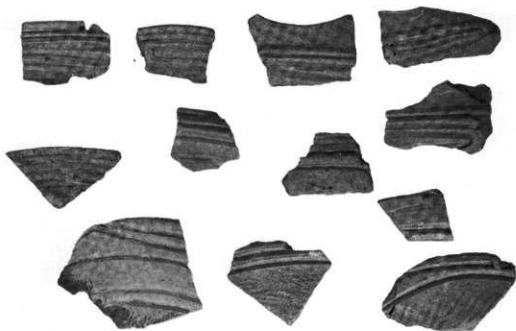


12-4

写真図版12 縄文晩期の土器1



13-1

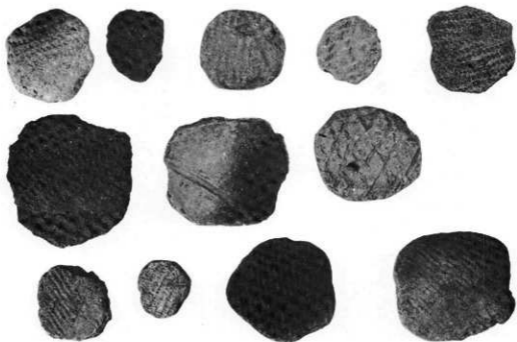


13-2

写真図版13 縄文晩期の土器2



14-1 土俵

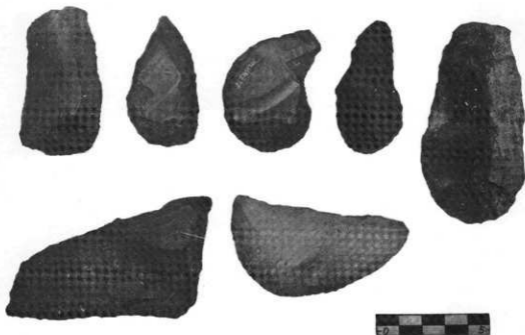


14-2 円盤形土製品

写真図版14

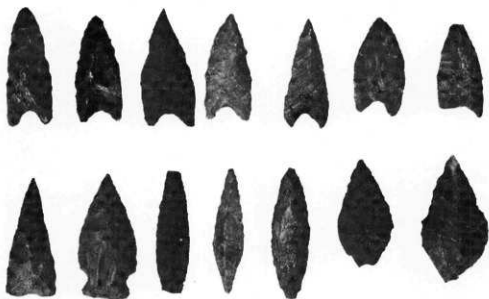


15-1 石槍



15-2 スクレーパー

写真図版15



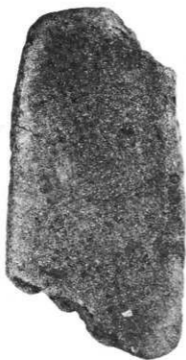
16-1 石鏃



16-2 石匕
写真図版16



17-1

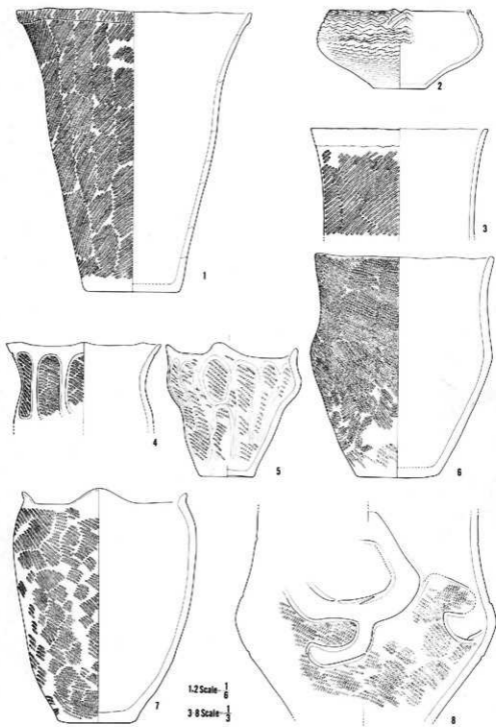


17-2 A

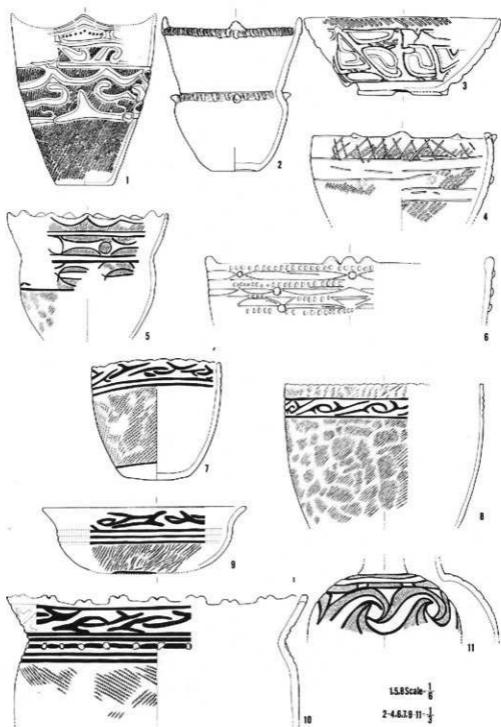


17-2 B

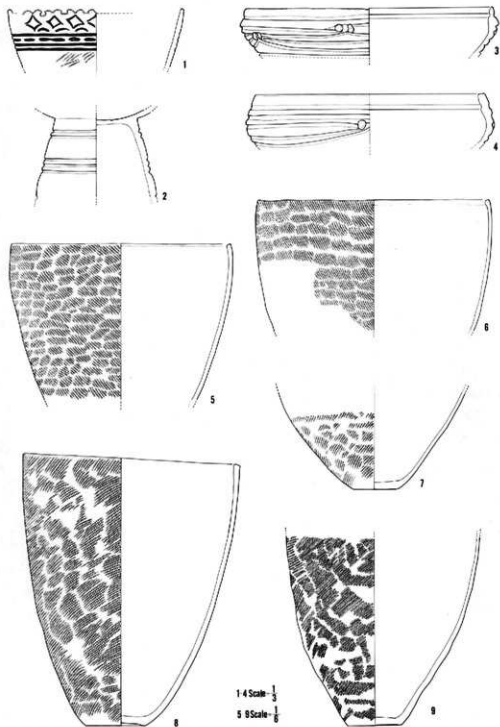
写真図版17 石皿



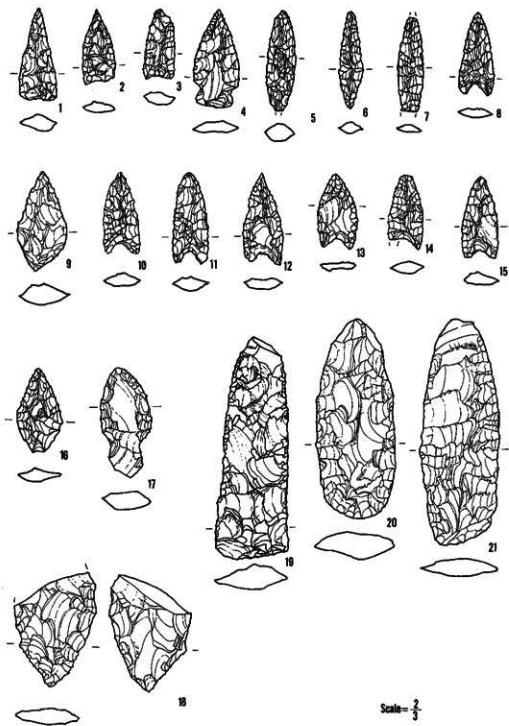
図版1 縄文土器 1



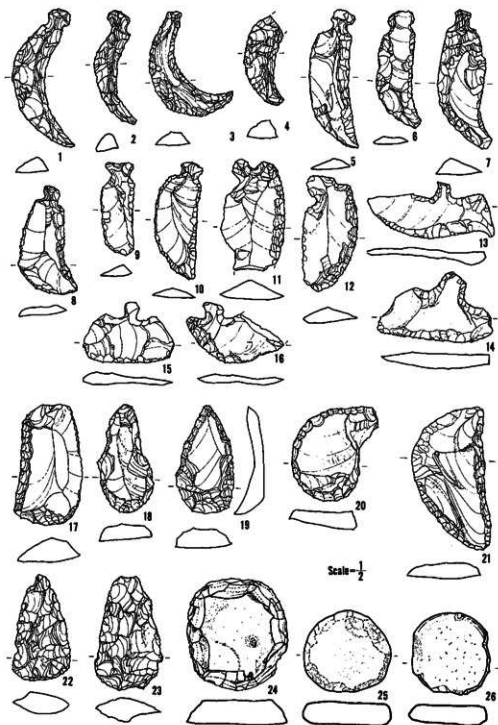
图版 2 绳文土器 2



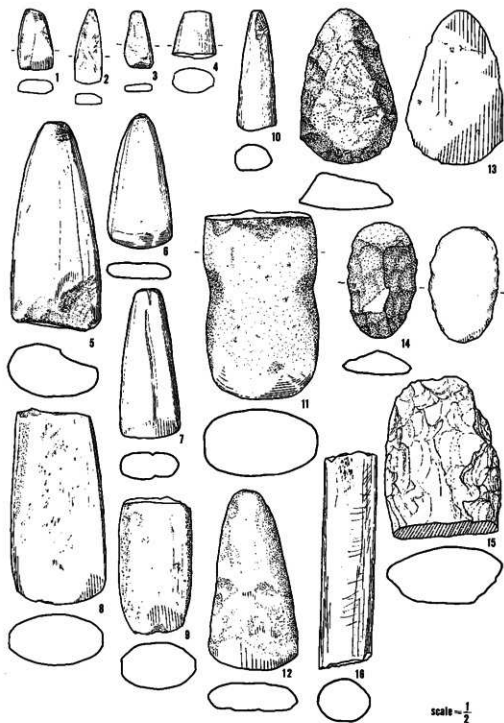
图版 3 绳文土器 3



圖版 4 石鏃・石槍

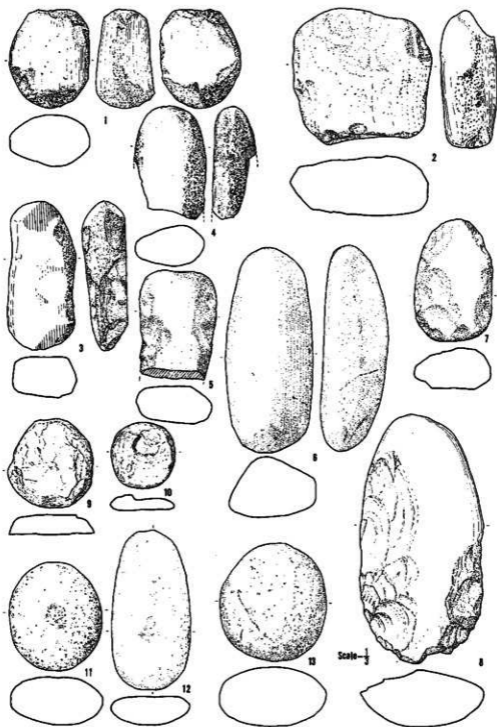


図版 5 石匕・スクレーパー・石へら・石錐

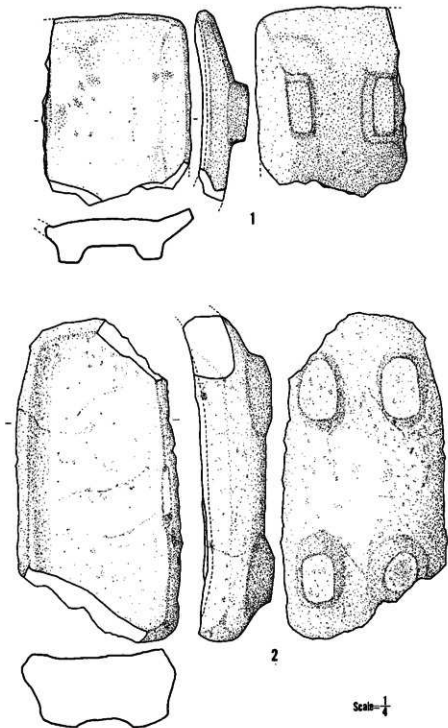


scale $\sim \frac{1}{2}$

图版 6 石斧·石剑



圖版7 石斧・凹石・磨り石



图版 8 石版

岩手県埋文センター文化財報告書第4集

二戸市沢内遺跡

(昭和52年度)

発行 昭和53年3月30日

発行者 (財)岩手県埋蔵文化財センター
岩手県盛岡市向中野字向中野39-1
(〒020 TEL. 0196-35-6622)

印刷者 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1978
